

えると、市民利用施設などもっと身近な利用しやすいところを情報提供の場としていくほうがベターなのではないかと思えます。

それと、市民館が今までの役割を終えたという表現はおかしいのであって、これからの10年に対応できる市民館に変わっていかねばいけないということをごどこかに入れていくべきだと思います。

学校を地域拠点化することについては、確かに拠点は大事だと思いますし、これを否定するわけでは決してないのです。しかし、先ほど言ったように市民館との連携をきちんと明記した上で拠点づくりをしていくという表現にしていただきたいなと思えますし、柿生小の図書館分館のような、地域に関われたすごくいい事例を具体的にに入れていただきたいなと思えます。

あと、重点施策においては幼児教育のことが抜けているのですね。現状と課題のところにも幼稚園教育のことだけでなく、実際に子育て支援施策は、施策体系のほうには入っているのは事実ですけども、この辺はどういう形で扱っていくのか分からないところです。重点施策5・6の辺りに、子育て支援に関するものが抜けているのではないかと思えます。

佐藤

施策体系の「家庭・地域における教育」という分野が、重点施策の事業としては抽出されていないのですね。だから、中間報告の概要版は比較的分かりやすく改革の方向性が書けていたのだけれども、この素案の書き方だとその辺が抜け落ちているのです。要は各柱がないということです。あれだけ幼児教育を強調してきたのですが、施策体系にはあるかもしれませんが、現段階では重点施策にはないです。いうなれば「学校を地域拠点化する」という表現の中に違った形で表現されてしまったということになりますかね。そうすると、「学校を地域拠点化する」という表現をもっと膨らませて、もともとここにあった家庭・地域における教育と学校が結びつかなければいけないという言い方が必要です。重点施策4は、ハードなところを強調してというご説明があったわけですけども、中間報告まで議論してきたところは、むしろ学校運営への市民参加とか、大人と子ども相互の支え合いとか、そういうソフトな部分です。それから地域における子どもの子育て支援みたいなものも消えているのです。

概要版で新たな事業だけ体系化した施策体系から、今回の素案で3つに絞られたプランの方向性、今回の施策体系、6点にまとめられた重点施策、それで改革というところに少し無理があるのではないかという印象があります。今のご意見としては、重点施策4「学校を地域拠点化する」を、幼児教育の視点とか家庭・地域の連携といったソフトな部分も含めた表現に直すことが可能であれば、多少そのあたりが復活してくるということです。さらに、文言の修正提案などもいただけたらと思えますが。

川西

私も、大下委員や斉藤委員、座長がおっしゃったことに全く同感です。

私は地域教育会議にかかわっていますが、地域教育会議という組織が市民の自主で運営されるべきだという最初の理念に従って十何年来た。最

初めから、みんなが利用できる地域の施設を事務局にして、いつでも顔が見えるところで地域の住民たちみんなが運動していこうということになっていたはずなんです。ところが、現実には地域の中で利用できる施設というのはなかなか見つけ出しにくくて、結局学校に戻ってきているという現状がありました。ここに来て今度は現状をそのまま肯定するのではなくて、もっと積極的に学校を地域拠点とするという方向性が打ち出されているので、もしそうであるならば、今までしょうがなく学校を使ってきたということから、今度は積極的に学校を地域拠点とするだけの実効性が市民に納得できるような仕組みがきちんと保障されなければ、結局今までと大して変わらなくて、地域拠点にはなり得ないだろうと思いました。

先ほどいろんな方がおっしゃったように、地域の中でも特に市民館というのは、市民がいつでも行ける施設ですので、市民館が今まで行ってきた実績も鑑みて、やはり市民館と学校という2つの大きな施設を市民に見える形で位置づけるというのは非常に大事なポイントだと思います。

それから、15ページの【内容】のところに「学校施設の有効活用」と書いてあります。学校施設開放運営協議会などでもよく話されるのですが、今川崎では子どもの数が増えているので、新設校を造れば別ですが、市民のコミュニティとして活用するスペースが、既存の学校ではなかなか得られません。例えば料理教室とか音楽教室とか、中学校になるとカリキュラムが集中で空く時期もありますので、そういうところを市民のコミュニティルームとして活用できないかというご指摘が時々あるのです。普通教室の転用ですね。時間外の市民への開放という、踏み込んだところまで見通した、新しい取組が盛り込まれなければ、今までと大差ないということです。

あと重点施策4がハードの位置づけということは分かりましたが、【展開する事業】の「校舎の耐震性の確保」という事業の中で「防災拠点として耐震補強を行います」みたいな文章になっています。けれども、地域の防災拠点として市民にきちんと認識させるためには、地域全体と係わるソフトの構築をしなければなりません。建物だけそこにあって、そこに逃げ込めばいいということは知っていても、どうやって逃げ込むのか、或いはどういう地域の防災体制をつくるのか、先生と児童、家庭、地域住民とがどういうふうに関わりあうのか、災時に対して平時からどういうことをしておくのか、非常に大きな問題が裏にあります。ただ建物を防災拠点にしましたと名前をつけるだけでは…。今だってそうなっているわけですから。ソフト部分の裏づけの膨らみが非常に薄いと思います。

また 事業では、学校施設の中に市民のためのコミュニティスペースをつくらうとありますけれども、これをどう運用していくのか、本当にそういうスペースの確保ができるのか、もう少しソフト部分と係わった書き方をしなければ説得力がないと思います。

それから、素案全体を見ての感想ですが、市民が「学習」とか「知識」というようなものをまず得なければ、市民の自治活動というのは発生しづらいので非常に大事なポイントではあるんですが、現実にやっている「実践活動

の保障をさらに進めて活性化する」であるとか、今まで川崎が培ってきたいろんな力をもっと発展させるのだという、そういうベクトルの書き方があまりにも少ないです。

一例を挙げますと、「行政区・中学校区の地域教育会議の見直し」という事業がありますが、中間報告では「活性化」という文言だったと思うのです。「活性化」から「見直し」では、随分マイナスになってしまったのではないですか。

もちろん私は今まで、地域教育会議がなし得なければならない使命とか意義を十分に評価しているがゆえに、それを最大限活性化して具現化するために、ここが問題だよと悪いことばかりを皆さんにお知らせした向きがあったことや、あるいは地域推進協議会がその辺りのところの手だてを早く全市的にやらないで来てしまったという、無作為に対して加担した反省をここで本当にしたいと思います。

しかし、地域教育会議をもっと活性化して、行政がすべきことと、こういう分権時代に自治という視点を持った上で住民が主体になってやることと、その間で市民館がコーディネートしてくれたり、いろんな学習機会を与えてくれたり相談に乗ってくれたりという、その辺のところをきちっと分けて、住民が今まで十何年やってきたけれども、できないから、もうなくてもいいよというニュアンスを与える書き方ではなくて、今まではできなかったけれども、今後はその力がさらに必要になるのだから、そのための手だてとか支援はやりましょう、そのためにはどうしたらいいのでしょうかということを匂わせるような書き方にしていただかないと、この文章では非常に後退したという感じを受けます。市民自治とか市民の力が大事だと言われながら、実際には市民が活躍できると思わせる楽しい文面が見当たらなくなって、非常に残念でした。

佐藤           そうですね。なぜこうなったのかということも含めて、これは大事な問題ですね。

川西           それから、スケジュールのことですが、これはまだ流動的だろうとは思うのですけれども、こういうふうに書かれると分かりづらいです。

片山           スケジュールはアタリで入れているだけですので、今後、もう少し分かりやすいものにしていきたいと思っています。

川西           それならば、不明にしていただかなければいけないと思います。

片山           地域教育会議についてですか。

川西           そうです。例えば地域教育会議の部分です。

片山 プランに載せられる事業は行政の事業なので、実施されなければ意味がないのです。

川西 でも、その実施は従来どおりの実施なのか、新しい位置づけにおける実施なのかが全然見えてこないのです。だから、もし新しい位置づけとして改善したり、もっと活性化したりするのであれば、そういう書き方をしてほしい。それが座長がさっきからおっしゃっている、既存事業と新規事業の見分けがつかないということなのです。

片山 そこら辺が分かるようにしていきたいと思います。

佐藤 概要版の施策体系は、新規の事業が中心的に書いてあったので、みんなすぐ理解できたのですね。ところが、今回の施策体系はすごくいっぱい出ていて、何を改革するのが明確に示されていません。

また中間報告で、社会教育に関しては、3つの視点に沿った11個の改革する項目が決められていたわけですね。その項目はどこに行ってしまったのかということなんです。それは全部どこかに入っているということですか。

斉藤 事業化されて施策体系に入っていますが、今言っている大きいものをどうしようかという論議が全部なくなってしまったのですよ。

佐藤 何のために改革プランと言ってきたのですかね。例えば中間報告の51ページで「市民と行政の協働による生涯学習を推進します」という項目があって、さっき川西さんがおっしゃった、「地域の教育活動において市民と行政の協働を体現していく行政区・中学校区の地域教育会議については、コーディネートを担う組織として活性化を検討していきます」ということを中間報告で決めたわけですね。それが「見直す」になれば、大体普通はやめるといふようにとらえますよね。

片山 「活性化」に直します。

佐藤 例えば今の「市民と行政の協働による生涯学習を推進します」とか「子どもと大人がふれ合う地域のセンターとしての学校にします」とか、こういう文章はどこへ行ってしまったのですか。

田中 すみません。先ほどかなり資料説明を端折ってしまったのですが、資料4の施策体系は、素案の23ページにあるような形で、個々の事業が文章化されて入ってくるのです。中間報告の内容についてはその文章化を進める中で盛り込んでいきます。ですから、消えてしまっているということではなく、203の事業の中にその考えを反映した事業が入っていれば、必ず中間報告での文章表現も入ってくるのです。

- 佐藤 今はその説明を求めているのではないのです。つまり、考え方が消えているということを主張しているわけです。例えば【展開する事業】の「情報センターとしての図書館の充実」とあれば、これが一番重要だと誰でも理解しますね。
- 片山 いいえ。この点につきましても、説明を端折ってしまって申し訳なかったのですが、【展開する事業】は重要な順番ではなくて、その前の【内容】に登場する順番に単に並べてあります。
- 佐藤 だけど、「情報センターとしての図書館の充実」ということが、中間報告の社会教育改革重点施策の最も重要な施策だという理解はなかったですね。
- 片山 【展開する事業】は単に【内容】に出てくる順番に今は並べてあるのです。重要な順番ではなくて。ですから、重要な順番に並べるべきだというご意見であれば、【内容】で説明する文章も工夫をして、そのように並べ替える必要があります。
- 佐藤 ご意見であればではなくて、中間報告で何を決めたと事務局は理解しているのかということなんです。どうしてこんなふうになんか変わったのかですか。
- 田中 施策体系の文章化は今作成をしているところですので、なくなってしまうということではないとご理解いただきたいと思います。
- 佐藤 だとしたら、なぜ中間報告の重点施策の内容がここに書かれていないのかということです。「改革の視点」というふうにみんなで議論して3つ定めたことが、【内容】というところにまず来なかったらおかしいです。
- 田中 素案の23ページに施策体系の一部がアタリで入っていますが、「市民が自ら学びいきいきと活動する地域づくり」という基本施策の名称は、まさに中間報告の表現そのまま、そこに中間報告で述べられていた内容が入ってくるとご理解いただきたいのです。
- 斉藤 それだったら中間報告の「市民の自主的な学習を支える」ということで一番最初に市民館のことをうたっているわけです。その後に図書館が来ているわけです。
- 田中 施策体系のほうには必ず盛り込みますので、ご理解ください。
- 斉藤 でも、これは重点のところの論議なのではないかと僕は思うのです。

佐藤 改革プランなので、何をどう変えるかということを確認するのが私たちの役割であって、それをどういうふうに網羅的な体系にするかというのは事務局の仕事だと思うのです。1年間議論してきた中間報告が、市民説明会を通して承認されてきたのに、その考え方がどこかに入っていますかね、というふうな話では、何のための1年間だったのかということになると思うのです。

例えば図書館にしても、「情報センターとして」なんていうことは中間報告では言っていないのですね。何でそういうことになってしまうのかということなんです。

言葉に対する責任ということ考えながら委員は発言していて、その裏づけとして皆さんがこういうふうに資料を出してきたわけですね。それぞれの委員会議の決定に基づいて発言している方もいます。

田中 ここでご理解いただきたいのは、中間報告は提言としていただいています。それを行政計画にしていかなければいけないということです。提言していただいた内容を、各事業におとして、行政の計画にするとこういうことになるという意味です。

佐藤 それは最終報告が終わってからでしょう。だって、最終報告まで我々の教育プラン策定委員会というのがあるわけでしょう。それは最終報告でこういう方向で改革したらどうですかという提言がまとまるのではないですか。

田中 3年間の実行計画を市の新総合計画にあわせて盛り込みながら、教育プランをつくっていただくということを何回もご説明してきたはずですが、それは行政と策定委員会の間でキャッチボールをしなければできないことなので、今その途中の作業にあるというご理解をいただきませんか…。提言をいただくだけで、その後行政側がプランにした時に、全然形が違ってしまったというよりは、やりとりをしながら一緒にプランをつくっていただいたほうがいいものができるわけです。

佐藤 でも、すごく些細な言葉がこういうふうに変っていくのだとすれば、最初から行政がつくれればよかったではないかという話になります。基本的な考え方でさっきから皆さんがおっしゃっていることは、行政区で市民館を中心とした生涯学習の体系ということを出し出す必要があるということが、今までの議論の中ですごく大きな柱だったと私は思うのです。

川西 例えば今回、重点施策1が「川崎版確かな学力をつける」となっていますね。中間報告の概要版では「生きる力をつける」になっていました。私はこの【背景・目的】の下のほう「本重点施策では、川崎市の教育を受けた全ての子どもたちが～」という段落はいいと思うのです。大下委員も今回ペーパ

ーをお出しになっていますが、私も、今みんなが求めている、或いは市民が力をつけなければいけないのは、いろんな情報を取得すること、情報を選択すること、問題解決や課題を見出す力とか、解決をする能力とかやり方を自分で選び取る力とか自己決定力、みんなでネットワークしながら共生しながらやるということとか、そういういろんな関係性の中から自分のアイデンティティを持ちながら、どういうふうにみんなで協力しながらやったらいいかという、1つの実行、実践、学習をして、それをまたフィードバックして次のステップに上げるというイメージです。そこまでみんなで責任を持ち合うことが、ここにも書いてあります「総合的な力」を子どもだけではなくて、私たち大人も持って、そういう大人がどんどん輩出されなければならないということが重点施策であろうと思っていましたから、それがイコール生きる力だというふうに了解していたのです。

だけど、「確かな学力」という言葉が出ると、学力も非常に大事ですけれども、もっと、特に私は地域で活動していますから、地域に住んでいる大人たちが子どもに対して、あるいは地域の大人同士でお互い学習しあえることというのは、「学力」というよりはまさに「生きる力」とか「社会力」「人間力」「コミュニケーション力」とか、そういうことなんですね。それが今どんどんなくなっているから地域社会がだめになって、そこからのいろんな問題が教育現場にも起きているのが実情なわけです。だから、何でここはこうなってしまったのか、「生きる力」ではだめだったのかと、ここから引っかかってしまったのです。こういうことを言うと、またこれを戻しましょうかというご議論になるのでしょうか。

佐藤 いや、それはどうでしょうか。一応、学校教育専門部会の範疇になっていますから、そちらでどういう議論がなされるかにもよるでしょう。

川西 だから、いくらここでいろいろやっても、学校教育とか学校行政へウエートがいつてしまうのです。学校教育専門部会の方とか教育行政専門部会の方たちが社会教育や、社会の中の学校のあり方ということ踏まえた上でご議論されているのであれば、当然、「市民の力を活用する」というような、自分たちの支援だけをしてくれという書き方は薄まっていくだろうと期待しているのです。

しかし、地域に開かれた学校づくりをするとか、地域に支持されて、地域と一体化した学校をつくるんだという言い方の裏で、どうも地域の皆さんの意見を聞きながらやるということがどんどん薄まっていくようで、それを目指してやってきた地域の住民とか市民活動は、どう反映されていくのかという道筋が私たちにできてこなくなっていて、その窮屈さをすごく感じます。そこをどう読み解いて、もう1回再構成したらいいのかが、よくわからないのです。

左澤 最初この素案を送っていただいたときの率直な感想なんですけれども、中間

報告の延長ではこれをなかなか読めなくて、どちらかというと今までの中間報告は報告で一旦区切って、その後に市民から意見がきて、それで新たに表現を大分かみ砕いて分かりやすく書いたような印象を受けました。

一番感じているのは、先ほどからお話に出ている新たな「学校を地域拠点化する」という項目ですけれども、ハード面でこの項目が入ったという説明がありましたが、どちらかといえば学ぶ市民の底辺の拡大というような意味で、より近い場所で参加する人数を増やしていくことを目的として入ったのかと思ったのです。しかし、ここには防災拠点としての整備とかが書いてあって、私が思っていたイメージと違ったので気になりました。

それと、先ほどからお話に出ている市民館との係わりで、ここであまり学校をハード面で強調すると、器の大きいのが市民館で、小さいのが学校というぐらいにしか自分では捉えられなかったものですから、少しそこが気になります。

それから全体的に、「現況と課題」は後ろに持っていかれていますけれども、今までの課題を解決するためにこういうプランをつくるんだという視点といいますか、全体を通じてそういった文章構成にしたほうがいいと思いました。今までもやってきたけれども今度こうなりますという表現が割と多いのです。そうではなくて、現況の中でこれだけの課題が載っているのですから、この中で非常に重要視すべき課題は、前段のところでも「今こういう問題が現実として発生しているので、こういう改革を進めて軽減します」という文章構成にしたほうが、分かりやすいのではないかと思います。

「確かな学力をつける」については、私も少し疑問をもったのですが、やはり「生きる力」といった文言のほうが私はスッと入っていける気がします。「いのち・こころの教育の推進」といったことが今とても重要なので、それが盛り込まれているのはいいのですが、「学力」という言葉に置き換わってしまうとイメージ的に違ってきます。

それから、今、池田小学校の事件のような、非常に予期せぬ犯罪が多く、そういう危機管理に対する教育、児童・生徒への安全教育といったようなことも、できたら【展開する事業】の中に追加していただければと感じます。

また、「教職員の力を伸ばす」では、人事評価とか採用方法の改善、研修プログラムの改善などが盛り込まれていますけれども、どちらかということ管理職の人が現場の職員を評価するという視点で書かれているように感じました。例えば教員が管理職を評価するという必要もあるでしょうし、保護者が教職員を評価するという必要もあるでしょう。幅広く教職員の力を伸ばすという視点から考えると、そういった事業も入れていただければいいなと感じました。

佐藤

今おっしゃった「こういう問題があるから、こういうふうな改革するので」という文章、つまり重点施策の書き方とか、23ページ以降に入る予定の施策体系でどのようなスタイルで書いたらいいかというご提案をしていただいたらいいと思うのです。

左澤

私は実は、素案のほうが内容は非常に平易になっているように感じたのですが、このプランを出したきっかけではないですけれども、この会議の目的から考えますと、「現在抱えている問題はこういうものがあります。それをこういう施策で解決していきます」という順序立てのほうが私は分かりやすいと感じました。

川西

私は「現況と課題」というのは、いろんな分野別の話になっていて、あまりにも個別の処理になり過ぎていると思うので、後ろでいいと思います。詳しくデータなどを見たければ、後ろにどんどんついてくればいい話なので。むしろ今おっしゃったように、これらの個別の課題は実はお互いのネットワークとか複合化、統合化によって大きく改善されるかもしれないという見通しを持って、では今度のプランはそういうところを頑張りましょうというふうに統合して書かれたら、確かに分かりやすいと思います。

たぶんプランの目標というのは、一つひとつ対応する所管課でやっていくことではなくて、例えば現況と課題の47ページの「地域と学校の関係」では、学校教育推進会議のことが取り上げられていまして、これは子どもの参加のことではありますけれども、まず学校の先生方が子どもを育てるときに、子どもたちは実は地域から学校に来ているわけだから、まず地域を知るといような視点がここで後ろ側に入ってこなければなりません。今後それぞれの学校の校長先生が裁量権を豊かになさってそれぞれの特色ある学校づくりもできないだろう、ということもあります。また、さっきの防災のことにしても、地域がどういう現状になっているのかということが分からなければ、なかなか実効性を持ちませんというふうに、すべてが関わってきているんですね。

ですから、後ろにいっぱいいろんな問題が出ているように、地域社会のありようがすごく壊れてきて、ダイナミックな地域という形になっていないから、地域再生をしなければならぬということ、たぶんこの目標の地域づくりという視点が大きく出ているのだろうと、私は理解しています。

次世代を担う人づくりというのも、実は次代を担う子どもだけではなくて、今を担っている私たち大人の人づくりもしなければいけないという2つの視点です。この間にブリッジとして、後ろにあるそれぞれの分野の課題が実は複合的に全部共通しているので、その辺が一言入ればそれでいいのではないかと思います。

佐藤

それは、なぜこの6つが重点施策なのかという、ことが書かれていれば、たぶんわかりやすいと思うのです。ですので、本日の部会では、この6つの重点施策についていろいろご意見が出ていますけれども、内容や書かれ方についてご意見をいただければ、大体この6つでいいのか、いや8つなのか、こういう視点でいいのか、というふうなことが確認できるのではないかと思います。

各重点施策は【背景・目的】【内容】そして【展開する事業】となっていて、中間報告とはかなり違ってしまっているのです。今の左澤さんのご意見は、そこに「こういう課題を抱えているから、こういうふうな改革の方向が視点として大事なのだ」ということをもう少し明確に入れていく、あるいは説明的に入れていくことを、要望としていただいたというふうに理解させていただきます。

また、重点施策3「教職員の力を伸ばす」では、【展開する事業】を見ると、基本的にこの教職員は学校教職員というふうにしかなれない書き方になっていますけれども、中間報告で「教職員の力を伸ばす」という議論をしたときには、社会教育の職員あるいは市役所の職員という、まさに教・職員ということであったのではないかと思うのです。これも議論から落ちてしまっているところではないかと思うのですが、どうでしょうか。

片山

ここでは、学校というところにあえて限定をしていますので、ご指摘のとおり、社会教育職員の専門性の向上ということとは含まれません。学校の先生以外の、社会教育職員も含めた職員全体の専門性の向上については、第1章の「プランの方向性」の2番目の柱にしていますが、確かに事業も施策体系に位置づけることが必要だと思います。

大下

行政計画という、行政として施策を打ち出すためには、行政レベルでのものの言い方、書き方、整理の仕方があるということは、僕はある意味では理解できないことはないし、それはそうだと思うのです。しかし、事務局の説明によりますと、重点施策というのは、後の3章の「施策体系」の中から重点的な事業を選んで持ってきて、「これを重点施策にします。全体の背景はこの3章の施策体系です。この施策体系の中に、中間報告に書いてある重点施策は盛り込まれます」ということだと理解しているのです。

そうすると、中間報告48ページの改革の視点 が、どちらかという今度の重点施策5に相当します。改革の視点 が重点施策4に相当します。それで改革の視点 が重点施策6という、書き方としてはこういう書き方があるかもしれませんが、ただ、関連がわからないのです。施策体系はこれから書くということになっていますが、施策体系から抽出してきてこうだという、その頭の文言がないので分かりにくい。整理の仕方が悪いのではないかと僕は理解したのです。

そうすると、中間報告では3つの視点が明らかに出ているわけですから、それとの関連で書き方を整理していただいたほうが分かりやすいのではないかと思います。

沢木

重点施策4「学校を地域拠点化する」というのを最初読んだときに、時代に逆行していくのかなという思いが多少あったのですね。学校の教育力がいろいろ問われて、その結果、今、改革プランの話合いが生まれているのだと思うのですけれども、その点ではこれは逆行しているなと思いながら話を